

患者さんのQOL (Quality of Life: 生活の質) だけでなく、手術をする側もメリットがあります

泌尿器科 助教 宮内勇貴

内視鏡手術支援ロボット「da Vinci (ダヴィンチ)」導入前は、腹腔鏡による前立腺の全摘手術を導入していました。その段階では、視野が狭く手術時に出血が多いという問題点が克服され、低侵襲な手術で非常にやりやすかった反面、手術の質や繊細さにやや問題点があると感じていました。「da Vinci」を導入して手術をしてみると、より繊細な手術が短時間でできるようになり、私たちも手術がやりやすく、患者さんの術後の結果も良好でした。「da Vinci」のメリットはたくさんありますが、まずは高度な神経温存手術ができることです。前立腺の周りには勃起神経など多くの神経があります。神経温存手術はこれまでも行われていましたが、「da Vinci」の導入により、高画質な立体画像で組織を見ながらできるので、丁寧に確実に神経を温存できるようになりました。また、前立腺周辺の全体的な観察も非常に鮮明にでき、術後の尿失禁の予防などについても確実に行えます。ただ単にがんを取り除くということだけでなく、手術を受けた後の患者さんの身体への負担軽減、QOLを保つということについても格段によくなりました。このことは、術後の患者さんを見ていて私自身も非常に実感しました。今後の課題は、がんをきれいに取りきるだけでなく、性機能や尿禁制といったQOLを高めていくことなど、「da Vinci」による前立腺手術の質や精度をより高めていくことを考えています。



PROFILE

みやうちゆうき◎愛媛県松山市出身、1997年愛媛大学卒業。専門分野は主に腎移植、腎不全、腹腔鏡手術、泌尿器腫瘍全般。日本泌尿器科学会指導医、透視学会専門医、泌尿器内視鏡学会認定医、日本移植学会認定医、がん治療認定医などの資格を持つ。高校時代からラグビーをしており、ポジションはセンター。最近は時間があれば朝のジョギングをしている。

愛媛大学医学部附属病院に期待すること

— 地域住民のために存在する松山市民病院 —

松山市民病院長 山本祐司

愛媛大学医学部附属病院に最も期待するのは「情報交換」です。現在、症例について附属病院で対応した方がいいのか、治療薬や手術はどうするのかといったことは日常レベルで情報交換・共有が多く行われています。これを更に高いレベルに引き上げるには各病院が単独で診療している症例についても情報交換することが必要だと考えます。次に期待することは「人材派遣」です。附属病院の檜垣病院長も各病院との連携を重視した発言や発信をされています。そこで意図されているのは、互いに密なコミュニケーションを取りながら診療にあたることだと私は理解しています。人材派遣が活性化すれば症例の情報交換も盛んになるだけでなく、附属病院の野元先生がされている臨床研究のサテライト的使用も増えるでしょう。それぞれの連携病院では考え方や立場も違うでしょうが、附属病院には設備やお金の連携だけでなく、互いに同じ気持ち・志を持っての連携をお願いしたいです。それは難しいことではないと考えます。

さて2014年、当院は財団法人永頼会設立50年という節目の転換期にあたります。4月1日には新南(S)病棟の第1期オープンを迎えます。この転換期に、新しい多様な人材の育成に力を入れるということで「変革と育成」というスローガンを掲げました。今後も松山の地域医療を守り、育て、支える役割を果たしてゆく決意であります。



PROFILE

やまもとゆうじ◎岡山県出身、1973年岡山大学医学部卒業。日本脳神経外科学会専門医、脳卒中専門医。未破裂脳動脈瘤・低髄液圧症の治療、顔面けいれん・三叉神経痛に対する微小血管減圧術を多数経験。岡山大学脳神経外科を経て、1979年、財団法人永頼会松山市民病院に赴任。部長、副院長を経て、2009年同病院長。大学時代は空手部所属。趣味はゴルフ。